

平成 20 年 7 月 20 日～22 日

衆議院災害対策特別委員会による災害状況視察で、中国四川省を訪れました

中国の四川大地震の視察を終えて、次のことを実感した。

其の一つ目は、この地震災害は天災であると同時に、人災の要素が極めて強いものであるということである。我々災害対策視察団は、北京を経由して四川に入り、震源地に近い「都江堰」と言う都市に到達をした。現地の人に確認したところ、自民党の二階議員を団長とする議員団が四川省までは来たことがあるようであるが、今回の都江堰まで災害の視察に来たのはこの団が初めてということであった。そして建物の崩壊の現場を見たときに、其の瓦礫の中で、あまりにも鉄骨が細く、また少ないことに議員全員が驚愕したことを明記しておきたい。

私が、結果的にそれにより多くの人命が損なわれた事実に対し、其の責任追及はどうかと言う問いを發したときに、それに対して、彼らから明確な答えが無く、むしろそれは不可能に近いと言うような発言であった。

日本のような民主主義であれば、また政権与党に対して政権交代可能な野党が存在すると言うことが、こうした責任問題においても、それを追求することを可能とし、国民の権利を主張する大きなバックボーンになっていることは当然ながら、痛感された。

しかし、さすがに共産主義国家の強みであると感じるところも少なからずあった。それは、被災地周辺に 7 箇所以上作られた、巨大キャンプすなわち、一箇所一万人を収容すると言う巨大仮設住宅の存在である。実際にどのくらいの人員がそこに収容されるかはわからないが、そうした巨大キャンプを次々に作ることを可能ならしめる強権の発動は、共産党一党独裁体制の強さともいえよう。

中国の奥地においては、自宅に便所や、炊事場が無いケースが少なくなく、場合によってはこの仮設住宅のほうが、被災前よりも住み心地がいいケースもあるのではないかと実感した。

また、一つ一つの地域や都市を、他の上海などの都市に其の責任を持たせて救援を競わせると言う手法は、成功しているようにも見えた。

なお、途中で、震災現場における救出復興作業に携わった人に災害の状況を聞く機会があった。彼によると、日本から派遣された救助隊に対しては、被災者の大きな感謝が向けられていると言う指摘があった。其の上で、日本人が死者に対して、手を合わせている姿が、現地の被災者にとってもっとも大きな驚きであって、ある少女の亡骸に対して、日本救助隊が合掌している写真が報道されたときに、其の少女はもっとも幸せな供養をされた少女であると、中国の報道でなされたということであった。

なお、災害とは関係ないが、中国における官憲に対しての一般国民の反発は強く（勿論それは行政府や、特権階級に対する不満であるが）、ある都市では、警官によって暴行を受けた青年が、その不当な扱いへの怒りから警察官を数人殺傷した事件が発生した。この事件を実行した青年は捕えられ、当然刑を実行されているであろうが、其の青年の行為が多く国民にとって英雄的行為として映り、インターネット上ではヒーローとなっていると言う話を聞き、中国社会の矛盾が、其の貧富の格差とともに、限界に近づいているのではとの感想をもった。

今回の四川の地震によって、視察をした都江堰周辺は、今は平常であるが、疫病や AIDS の蔓延といったものが進んでいると言われる。

すでに記したように、巨大キャンプ、仮設住宅の間髪入れぬ建設はこうした不満をオリンピック前に爆発させないための電光石火の対応だったのかもしれない。